

三河 アララギ

平成二十八年

新年号

第六十三卷 第一号



ニューヨーク日記(111) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

IT'S HALLOWEEN!

Blue Shoe Diaries



ハロウィーンだよ最近では日本でも仮装して祝うようになったよね。今年は彫ったパンプキンを飾って雰囲気出して(?) デイナーにローストチキン作ってみた。わりと立派にできたでしょ? さて、お化け達がキャンディーもらいに来るかな?

Happy Halloween! I roasted a chicken in a cast iron pan for Halloween dinner. I saw a whole chicken being sold for less than \$3... Was too scared to buy that one. Went for the no-antibiotics \$12 chicken. With rosemary and thyme, it smells so good!

目次

第六十三卷第一号(通巻七四五号)

表紙・風

今泉 由利 (1)

『いーとよせ』

いーとはとぶ (26)

小柳千美子 (34)

ニューヨーク日記(Ⅲ)

Blue Shoe (2)

水野 絹子 (26)

川井 素山 (35)

感銘歌 御津磯夫第十歌集

(4)

牧原 規恵 (26)

今泉 由利 (35)

歌集「はゞきくさ」Ⅰ

大須賀寿恵 (5)

稲吉 友江 (26)

正岡 子規 (35)

歌集「草々」

今泉 米子 (6)

鈴木美耶子 (26)

田中 清秀 (36)

「氷魚」の稿

岡本八千代 (7)

吉見 幸子 (26)

丸山醉宵子 (38)

始まる

今泉 由利 (8)

牧原 正枝 (27)

本からのあれこれ②

紅葉狩り

弓谷 久子 (9)

岩瀬 信子 (27)

ある自然科学者の手記(44)

吉祥山に

内藤 志げ (10)

石田 文子 (27)

大橋 望彦 (42)

備亡録

林 伊佐子 (11)

森 厚子 (27)

絹の話(62)

畝をきりゆく

安藤 和代 (12)

山崎 俊子 (27)

短歌に詠まれた茂吉 五十二回

次郎柿

鈴木 孝雄 (13)

三田美奈子 (27)

楽しい時間(38)

紅白饅頭

清澤 範子 (14)

東洋大学 (28)

鮫島 満 (46)

成りきらぬ

伊藤 忠男 (15)

安藤 和代 (30)

「楽しくマナー」⑦

佳き日

足立 晴代 (16)

青木 玉枝 (30)

「歴代天皇御製歌」(四十七)

霜月の事

近藤 映子 (17)

森岡 陽子 (31)

貫名海屋資料館 (52)

一の酉

森岡 陽子 (18)

今泉 由利 (31)

再びの長塚節の生家へ(Ⅰ) 夏目 勝弘 (54)

ひと役買って

富岡 和子 (19)

植村 公女 (32)

(2)

行在所跡

白井 信昭 (20)

米田 文彦 (32)

「氷魚」のことから(180) 岡本八千代 (56)

刻一刻を

阿部 淑子 (21)

柳田 皓一 (32)

ことのはスケッチ(445) 今泉 由利 (57)

温もり

山崎 礼子 (21)

山元 正規 (33)

編集室だより(二〇一五年 十一月)

分かち合ひたし

杉浦恵美子 (22)

山迫 京子 (33)

三河アララギ (58)

似合ふよ

山口千恵子 (23)

森岡 陽子 (33)

和菓子街道(Ⅲ)

再び長塚節の生家へ(Ⅰ)

夏目 勝弘 (24)

松本 周二 (34)

お知らせ・「三河アララギ」について (60)

(2)

(25)

感銘歌 御津磯夫第十歌集

小鳥来り小鳥飛び去り眼のまへの梢の熟柿無くなりてゆく

眼に見えず耳に聞こえず降りすぎて庭の都石暮れゆきにけり

継るべき杖にと青竹を長く切るたわいなくよろめく自らの為

分かりましたと言はねば結論とならざるを聞きつつ我は昼の転寝うたたね

遊ぶ日のつひになくして川浪の白き飛沫はTVにて見る

この世にはあらざる如きわが歩み曼珠沙華赤々と燃えたり夜を

引馬野の磯の上にてあかと引き裂きとどろく冬に入る雷

新緑となりたる庭の竹むらを白鷺わたるつばさひろげて

杖つきつつ深き夏草分けゆきてわれは近づくパロ・ボラーチヨの木に

老病の老人いくたりをわれは診て午後は横たはる十薬の中

歌集 「はゝきくた」

大須賀寿恵

持ち帰りし仕事そのまま机におきて白けし炭火に餅焼きはじめ

何故に口を利かぬを知りたくてカナリヤが卵をうみしを話してみる

この職場君さりゆかば吾もまた従ひ行かむと心にきめたり

たどたとタイプ打つ吾の後に副長は立ちて煙草喫ひおり

耕耘機の音響き合ふ野の中にひとり吾が兄は牛使ひゐる

天皇皇后皇太子迎へし護岸をも高潮はつひに乗り越えて来ぬ

印刷の紙に切れたる中指を嘗めつつ一〇〇〇部刷り上ぐ

待合室の螢光燈は消されゆき吾の頭上の一つ残される

やうやくに生きゆかむと覚悟せし朝を母引く車押し行く

栄転の人等賑わしく出で行きて吾ひとり事務室に原紙切るなり

歌集「草々」

今 泉 米 子

志賀山に入らむとしつつ立ちどまり見上ぐる石の何のみ佛

味酒の三輪の磐座いはくらをくぐる水巖にうけて賽の箱をおく

神代より真清水は巖に流れつつプラスチックのコップならべぬ

三輪山を登りおほせず下り来ぬ狭井の茶店の青唐芥子

油揚げの大き一枚のせてくるこれが大和の大きつねうどん

春を待ち秋を願ひぬ病める子に今朝芝の上の白き初霜

幾度もその葉を蟲に喰われつつ枸杞の実朱く残る庭隅

机の上に奈良の木彫雛小さくてはやく呆けたる土筆を供ふ

南米へ帰りゆく日の近づきて子は古雛にひと日をあそぶ

さくらには早き日本をたちゆきぬさつめばえの一字をくらべなどして

「氷魚」の稿

蒲郡 岡本八千代

「氷魚の稿を書かむとまずは四^{よん}Bの鉛筆四五本削りおくなり

「氷魚」の稿180回目をつひに書くなどか想ひはこもごもとして
わが書屋六畳の間のあちこちに「ノボさんを読む」などの本ばかり
傘させばはやポツポツと時雨^{しぐ}る音わが「氷魚」の封筒抱きて歩む

ポストまでの時雨る夕暮の路歩^{みち}む今書きあげし「氷魚」の稿抱きて

また今宵読まむとするはキーン著の子規と茂吉の短歌の頁

深みくる冬の夜長の愉しさよキーン著の本の子規の写生論に

庭の径そこここに淡きアカマンマわが足元に触るるも嬉し

一粒のオレンジ色の君影草にまた思ふかな君とのゆかり

志賀山の寺萩今年も黄葉^{もみぢ}せり先生ご夫妻の思い出の萩

始まる

東京 今泉 由利

天照大神よりはじむるよパワーポイントプレゼンテーション

日本の始まる始めの和歌にして霊石山へ行宮のとき

キラキラのアニメーションばかりにて今の子等を見守るばかり

初冠雪溶けてしまひし富士山を右肩にして旅はつづくる

富士ヶ嶺にいまし沈まむ太陽の六千度の色富士山燃ゆる

ものはみな枯れゆく景色の中にして紅ひとつ寒木瓜の花

谷田川の流れは見えぬまま谷田川の上辿りゆきゆく

ユリノキの冬木となりし枝々に初夏に咲きたる花萼あまた

地藏尊菩薩となりゆく木柱をすっかり支ふわが左手よ

朝あさな朝さな昼は昼とて晩もなほひとつ色紙を掲げて生くる

紅葉狩り

豊川 弓 谷 久 子

思い出は小学校の運動会明治節なりき今は文化の日

雨降りし記憶無かりし運動会小さき村の母校なつかし

丈低く高砂百合がときじくの花咲かせをり秋草の中

多発テロのニュースが一日流れをり無為に命の奪われてゆく

朝刊の平和の俳句「鉦叩きあまねく平和を呼びおこせ」

ながらえゐれば九十年代か戦争に命散らせし我が同世代

我が縫ひし紅葉の柄の服を着て紅葉狩りにと子は出掛けたり

手作りの楽しみありて今日も又ミシンに向ふ心がはずむ

足踏みのシンガーミシンを響かせて手作り服に子等は育ちぬ

デズニールランドファンの姪の土産なりマシユマロ甘し柔かし

吉祥寺に

豊川 内藤 志げ

足許を氣遣いながら歩む癖今朝より視線を吉祥山に

遠くより鳥の声に見渡しぬ鳴き鳴く二羽の小さく小さいし

鳴声に見上ぐ空は綿雲に白々高ししろじろ広し

門径の椿の葉陰に下り見ゆ花と見紛うは烏瓜の赤

つねつねにわが運転を氣遣う娘今日は駄まで迎へたのむと

乱れつつ交差す雲のその中を小さき一機が輝き進む

大根の細きを選び抜くように息子にたのみ葉を落すわれ

ポリ桶に山と重ねかさし大根の重石の傾き作業場に見ゆ

鶉か羽根振るわせ梢に止る未だ止まざる雨を眺むる

枯色の落葉の路の登り坂櫟の黄葉ひらりひとひら

備忘録

岡崎 林伊佐子

備忘録の手帳しらべてとしどしに種まき育てる自家栽培は

新鮮な野菜育てて老二人三度の食に満ちたりてをり

現代の農耕ではなく無農薬の根菜類を培う老いの楽しみ

キャベツ葉を食みて育ちし紋白蝶野菜に花にふれて遊びぬ

草むしる吾に鎌首ふりあげし蠅螂いつしか姿を消しぬ

西の方遠く暮れゆく茜空に今日一日の農仕事終へ

田も畑も放置されていて猪が山よりおりて餌をさがしぬ

背伸びして届く程までたれさがる八屋柿とりぬ晩秋の里

師の歌集「作歌の友」を賜りて短歌を詠みつぐ生き甲斐となる

紫の棘萋の花咲きわが畑と友の畑の境界いろどる

畝をきりゆく

豊川 安藤 和代

教員の採用合格と孫の声唯ただうれし香る木犀

コンバイン進みもどりてもう稲は刈られておりぬ鳩の飛び立つ

ゴーヤづる片付けていくその先に花二ツあり心痛めり

西風にのり来る列車の音響き明日蒔く種の畝をきりゆく

温室にトマトをつくる青年は茶髪が似合うピアスが似合う

サーモンにレモンペッパーの風味付け風邪熱吾の食欲そそる

冷やかな風の中にもまゆみの実割れてほっこり真紅が見ゆる

アスパラのオーストラリア産茨城のピーマン仲よくスープの棚

孫娘のポリーフレンド家に来るバアチャン朝から落付かずをり

被災地へ出す絵封筒心込め福招き猫と大きく描く

次郎柿

沼津 鈴木孝雄

サニールタス陽光受けて輝けり赤い葉っぱが食欲そそる

次郎柿故郷思い頬張りぬ味・色・形に齒ごたえの良さ

イソギクが一枝また一枝と咲き始む黄色い花芯に小さな花卉

真黒な雲にわかにかき分け雷光りて大粒の雨

白菜の葉っぱに無数の糞がありかき分け探す虫とナメクジ

イソギクの花弁の長さ株ごとに違うは何故だ種同じなのに

デイルの葉が夜露に覆われ銀色にやがて日が出て元の緑に

畑よりとった旬の小松菜で酒盃すすむ鳥の味噌鍋

小カブ抜く細長い根が一本の細さの中に秘めし力かな

八角が沼津産とは信じがたし思わぬ所で北を味わう

紅白饅頭

春日井 清澤 範子

町内より敬老祝ひて紅白の饅頭まんじゅう戴く夫と揃ひて

秋晴れの陽の差す公園を散策す鳥の声聞き楽しみながら

園芸店にてピンクのカクタス一鉢を買ふ楽しみを今日は持ちたり

腰かばひつつ夫の植ゑたる柿の木はたわわになれる甘さ充分

雨降りて吾最善を尽くしたか湯舟につかり想ひはめぐる

時計持ち携帯も持ちりハビリに遠まわりする吾歩く道

隣り家のポーランド土産に戴きぬ布に描かきある幸運の鶏とて

寡黙なる吾と思へど吾が夫は丁度いいよ時とき言えり

花模様の雨傘の色は緑にて娘にもよし吾にもよろし

堤防の桜の木葉それぞれに五・六枚づつが枝に残れり

成りきらぬ

大阪 伊藤 忠男

忙しさ忘れさせるか友笑顔この夜眠れぬ高ぶり中

旨い酒料理味良し店も良しさらに良きかな友との会話

悲しみに苦しさ辛さ寂しさも無縁なるかな今のこの時

東京の風はまばゆし目にしみる秋の夜長を過しかねてか

登壇した話しはじめは人見えぬ慣れてうなづく顔顔に顔

甘えたい気持ち疲れのせいにして心の弱さ悟らせぬなり

風吹けば紅づく前に葉を散らす今年全てが噛み合わぬまま

暖冬と言われその気も挫かれる身震いさそう今朝の冷え込み

許されぬテロを生み出すその土壤差別貧困はたまた何が

首筋をかすめる風の冷たさに師走なのだと知らされるなり

佳き日

東京 足立 晴代

秋の空^{つか}束の間ありて山茶花の梅雨となりしか絹糸の雨

テロありて罪みなき人々^{びとう}撃れたり思想の異^{こと}なり驚くべきかな

とりぐの^{てりはよそお}色ある照葉装いて山々飾り錦の如し

栗むきをわけなくこなす娘の手たくましくなりぬ年を経て

ハロウイン坊ちゃん^{かぼちゃ}南瓜の手料理^てが好評なりて娘は満足

珍らしく木枯しふかぬ七五三幸なるや温かき日々

菊の香の薫る佳き日に生れ来て皆に祝^{しき}され幸^{さいわい}なるかな

天高く馬肥ゆる秋いづこにや山茶花梅雨の晴れ間待ちつゝ

渋柿と知らずに食す人ありて道辺に捨てたる柿あわれなり

菊の露求めし人は古^{いにしえ}の九重人の被^{かぶ}綿^せなり

霜月の事

名古屋 近藤映子

時習館六回生の同窓会霜月三日の参加は百名を越す

卒業後早や六十余年過ぎたれど同級生の顔々に戻りぬ

秋晴れの続きて居たのに七五三近付きし日々曇りたり

孫麗美の七五三参りの晴れ姿三才の着物姿に花かんざしを

消灯時刻は21時のせまり来て机上をボツボツ片付けり

病院の生活ルールのシオリ読み早寝早起き従いぬ

リハビリは理学療法と作業療法の有りて終ればぐったり疲れたり

原稿書の途中なれど消灯時間は厳しかりけり

吾は又入院したる大学病院の十二階の夜景は美し

勤労感謝の休日に娘は当直なれば夜の訪問なり

一の酉

東京 森岡陽子

秋の空さやけし風を頬にうけ小伝馬町の史跡で偲ぶ

松陰の終焉の地の片隅で桜の葉葉は染まり始まる

虫の音もすっかり消えた晩秋にただただ静か満月は射し

亥の月の初亥日は炬燵出すと聞く江戸に大火事ならぬ願掛け

眉月夜ジャズにシャンソンバナナボートアウンザワールド旅はどちらに

一の酉熊手の並ぶちこちで手締めのシャンシャン景気のよろし

冬初めまだまだ転がる団栗の梢の実拾う東大キャンパス

学内の古木の中にパット咲くジンジャーの花白く若若

川越の東照宮の特別展三十六額歌仙公開

蔵街の芋菓子並ぶ浪漫通り汁粉の餅も芋で作ると

ひと役買って

東京 富岡 和子

配らるる神社の護符は各家に若きホームは神柵のなし

銀杏は少しく匂い黄葉となり青い巨木の繭の実は赤

霜月は忘れたようにあの暑さシャツ干す時の青空うれし

いと小さい蟪蛄の児は野菊のなか花瓶でそれぞれひと役買って

もういいよ黄色の柚子はかくれんぼ葉より主張す立冬の朝

小庭辺の小菊と鶏頭けな気にて進まぬ仕事冬はそこ迄

勤労と収穫感謝祝日に神嘗祭かんなめさいと紛れて辞書を

朝届く野菜五種類は友の作海の香のこる無農薬なり

雪だより暮早くして寂しきに友の入院知らせを受ける

困りごと急なことなどなにもな無くただ気忙しく師走迎える

行在所跡

豊川 白井 信昭

中島の田のひと巡り今年より田植え稲刈り法人に移る

文明ダチュラ磯夫ガチュラと咲き継ぎてわが家に咲ける記憶薄れぬ

秋の日の和らぐ日差しに木槿むくげ咲く行在所跡の宮浦に立ち

秋の日を畑に色よく実りたる柿の木いく本枝重たげに

散歩通音羽川堤セイダカアワダチソウ夕日に染まる金色こんじきに染まる

茜さし沈む夕陽を背にうけて行在所跡まがる散策

さわさわと心も晴れて花芒道すずきを歩みつつ月の出を待つ

満ち潮の川面うてる鯔いなの群れ土手を行きつつ時に楽しむ

満月のだあれもない音羽川水面みなもの月を崩すいなだの群れ

小春日のような霜月つづく今日「介護の日」という我誕生日

刻一刻を

横浜 阿部 淑子

山茶花のつゆに入りしか山々は霞かかりて陽を待ち侘びる

従兄弟より招かれ観る写真展花の命の自然美に酔う

寒空に賑わうバザー家族連れ豚汁早くも売り切れとなる

青空に向かって初の国産機飛行成功嬉しきニュース

日本の商業衛星打ち上げて初の成功長寿衛星

新しき年迎えて我と夫と刻一刻を充ちて過ごさぬ

温もり

朝霞 山崎 礼子

障害の児を見守る母の笑み日だまりに似て心温もる

分かち合ひたし

蒲郡 杉浦恵美子

絶対に着る筈のない夫のシャツアイロンかけて再び仕舞へり

独り居のひと日亡夫の服仕舞ふ我が屋上に鳶の鳴き声

我が祖母は独り暮しになりし日々小皿ならべて夕餉の食卓

小皿には胡麻和へ人參金山寺きんかの酢漬が祖母の食卓

吾が今美味しく思ふものはみな親しき人と分かち合ひたし

たった一泊されど未知なる人達と相部屋と聞く本山への旅

御影堂の天井高く昇りゆく我等が合唱音楽法要

能登の方来年もまた会いましょう挨拶呉れぬ解散式にて

はつとせり合元少し頼りなし見た目変わらぬ叔母の歩みが

フエイちゃんは剛いぞふるさと頼らずに幼子抱へパリに暮しぬ

似合ふよ

豊川 山口千恵子

はやばやと裸木となれる柿の木に柿の実一つ生りてをりたり

庭隅の一人生えなる柿の木に渋柿生りぬ赤く色付く

ホトトギスはや素枯れたり玄関脇心せはしく過しゐる日々

日の射さぬ倉庫の脇の塀際に今年は赤き南天円実

米作り止めし我が家に運ばれ来ぬ三十キロ入り飯米七袋

わが手にて作りざる米七袋一年分を倉庫に積み上ぐ

ざくざくと美容室に切られをり白髪混じりのわが髪の毛

ばさばさと切られて落つるわれの髪黒髪といふにはほど遠き髪

似合ふよと言われし髪形超ショート鏡の前にやや悔やみつ

先のこと思ひて不安になるよりも今日の一日の良きを願はむ

再び長塚節の生家へ(1) 豊川 夏目勝弘

鬼怒川の暴れて鐵路が跡切れゐる復旧いつかとたびたび電話す

待ちてゐし鐵路の通り乗り換えの下館駅に降り立ちにけり

災害の状況みんなと自動車が一番前に立ちてゐにけり

石下駅に近づきてきぬ災害の痕跡車窓より見ることもなく

小説の「土」のなかの洪水の行が浮ぶくだけ隠しき鬼怒川

鬼怒川も田畑も家並も変はりなし洪水の禍みづここまで及ばず

いま再び節の像を見上げをり現つのごとし深める念ひ

柿の葉くろぐろ残し大木は晩秋の青に鎮づもりてゐる

思ひこし書齋の障子開けられるしばし立ちゐて緑より上がる

柿の実を盛りて根岸へ持ち行きし籠が床の間に寂しくありぬ

再び長塚節の生家へ(2) 豊川 夏目勝弘

大根の甘さを村人に誇りつつ堆肥の大切さを節節と説く

雨水にて堆肥の成分の流出を防がんとして小屋を建てたり

白壁の三十坪余りの堆肥小屋今に使える頑丈な造り

九州の旅より持ち帰りきしノウゼンカヅラ柿の太木に寄りて百余年

母屋前の隅にドームとなせる刈り株は九州よりの細葉のススキ

鶴亀の彫り物のある塀中門へいじゅうもん今建てるなら新築の家建てられるとぞ

晩秋の日差しに鶴の彫り物が破風下にて浮き立ちて見ゆ

竹林の多きを思ひ風土を巡る六町二反余と拡げし名残りか

国生の渡し場跡にしばし立つ浮ぶは我が村のかつての渡し場

対岸の部落の郵便の配達にはなくてはならぬ我の乗り物

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

雑草のヒメジヨオンの花秋の花風に向かひて高々咲きをり
庭隅に山吹の黄の忘れ花咲くは老爺の眩きにも似て

水野 絹子

若僧と声をあわせて経を誦ず無心の如く南無阿弥陀仏
突然の狂いたるときけふの雨すべての音さへかき消してなほ

牧原 規恵

夫と来し里山四谷の千枚田ハゲ掛ける人の五人六人か
六月^{むつき}になる孫はやうやう初詣り願ひは一つただ健やかにと

稲吉 友江

ハゼ釣りを楽しみし子らつひに帰り今はわれのみひとり「ぐち浜」に
下校する小学生らを見守る役桜黄葉^{もみぢ}の下にゐるわれ

鈴木美耶子

運動会嫁の手作りの稲荷鮓を囲みて広ぐ青空の下
今日こそは栗金団を作らむと栗つぶしをり夕べの厨に

吉見 幸子

ふり返り我を待ちゐる孫二人に追ひつかむと登る稲村山に
小一の孫がせがむは電子辞書見知らぬ画面にはや遊びをり

牧原 正枝

さはやるかな秋日和なり更衣に箆笥ににほふ樟脳うすく
孫からの長寿と書きたる南天の箸をつかひて黒豆を煮る

岩瀬 信子

秋アカネ群れて飛びをり畦道に幼の帽子にひとやすみかな
角の家に鉄線咲きをり紫に何年ぶりかな花をば数ふ

石田 文子

餅投げの櫓に居並ぶ男衆誇りて立つごとかつての夫もか
幸せは自分の心が決めるらし「心の暦」にけふは安らく

森 厚子

山と畑使ふ筋肉違ふとか言ひつつ夫はリュクを背負ふ
娘の帰りビーズを刺して待ちてをり時々ビーズが指弾けつつ

山崎 俊子

上弦の八日の月は西空にかたむきてをり色オレンジに
かの夜に逃げたる蜘蛛か天井の隅に揺れをりぬけがらふうはりと

三田美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

何もかもやる気おきない中二病操縦不能他人の如し

慶応義塾普通部二年（神奈川県） 武井 信吾

アメリカの廣い大地に突き刺さるケイの打球は僕の憧れ

慶応義塾普通部二年（神奈川県） 藤木 洸こう

快晴でくも一つない青空に私の祖母はのぼっていった

捜真女学校中学部二年（神奈川県） 安部 栞しおり

帰宅した機嫌の悪い父の手に私が好きなワッフル三つ

捜真女学校中学部二年（神奈川県） 石川友香理

御嶽を映す画面の右の雨思い知るなり自然の脅威

神奈川大学附属中学校二年 布川 理央りお

夢語る友の姿勢が凜として負けじと力お腹にこめる

神奈川大学附属高等学校二年 岡崎 瑞穂

将来の夢を問われて黙り込む幼い頃は三つを言えた

神奈川大学附属高等学校二年 田村 璃咲

もう五年単身赴任の父さんの帰り待ってる食卓の箸

東京学館新潟高等学校一年 新井 莉菜

二十五時父の靴音聞いている「おかえりなさい」言いたいけれど

東京学館新潟高等学校一年 中村 綾那

温暖化先の事だと思ってたスコールみたいに雨振るけど

東京学館新潟高等学校一年 山上 昂大

私の一首

早生の田に水増す音の高くして小さく採るる稲の花見ゆ

安藤 和代

十一月号より

その稲の花はまるで日本人形の髪飾りの様に見えました。散歩途中の田の稲の先に小さく白い花がかすかに揺れて小さいままに「しっかりと咲いていますよ」と私に語りかけている様に見えました。これからお米となる大切な時その花を守り励ます様に田に流れる水の音が高く聞こえました。

稲の花の可憐さに魅せられ詠んだ一首ですが説明になつてしまいもう一步深く詠まなければと反省しきりです。

柿すだれ車窓に見つつ山里に逝く秋を知る雲は流れて

青木 玉枝

この山里に二度目の秋を迎へて四季のうつり空気のうちさ鉄路のひびきもなく初めて体験侘しくないと人と言われましたがこんな住居もあるのか都会の夢も一人寝に夢物語りに楽しむ夜々今の生活に満足しています。山も紅葉の季節となり手をかざし朝々ながめる私一人の楽しい一刻です。柿のおいしい事何より嬉しく棚に一杯買つて楽しみの明け暮れです。

虫の音もすっかり消えた晩秋にただただ静か満月は射し

森岡陽子

私の寝室にはかなり長い時間月の光りが射し込む。四季折々月の色は変わるし、形は日々痩せていたり太つて来たりと変化し、私を心から楽しませ癒してくれる。そんな月を見ると一首詠みたくなる。今宵も満月を眺めながら作りました。

武蔵野にうけらの花の咲きにけり駆け寄りて見るその桃花^{もも}褐色^{そめ}を

今泉由利

武蔵野のおもかげを見る東大駒場キャンパスを吟行中、ひと色にピンクとは言われない色の花をみつけ、「何だろう」かけ寄ると、おけらの花だった。

古名をうけら「厄除け」の植物、菊科。「萬葉集」に武蔵野の「うけらの花」を詠んだ歌があるのを思いだした。恋しけば 袖も振らむを 武蔵野の うけらが花の 色に出づなゆめ

『俳句』

薄原遠く遠くの兵馬俑

植村公女

宵寒の小雨となれり木挽町

ふん張つて動かざる犬冬隣

木遣歌小春の空へ伸びゆけり

米田文彦

掛け声は商売繁盛熊手市

湯煙の外はたそがれ落葉道

冬帽子深めにかぶり屋台かな

柳田皓一

冬の月うさぎの耳の垂れてみゆ

早朝の落葉を寄せる長簞

青空を眩しむごとく帰り花

山元正規

突堤に影重ね合ふ冬鷗

急流にきりもみ沈む櫨落葉

一枚を葉に選ぶ柿落葉

山迫京子

遠き日の温もり匂ふ落葉焚

音もなく降る雨落葉音もなく

婆の皺のつぺい汁の一味と

森岡陽子

寄合はお茶とゆべしの山の里

冬浅しうんだんのぼり蔵の街

帰り行く人の背温し枇杷の花
短日や低音うましヴァイオリン
湧水を集めし底に柿落葉

松本周二

冬ざるる目玉輝く不動明
しぐるるや茶碗ひとつの夕支度
枯山水落葉に埋まる石燈籠

田中清秀

曇天に紛れんとして冬桜
茶の花や古りし水車は音立えず
枯尾花電車は町を抜けにけり

小柳千美子

薄き日や落葉の嵩の切通し

川井素山

雪嶺を帯に染めゆく朝日かな

佐久の鯉語り残して櫓の宿

留守番をしてをります神は旅

今泉由利

小鍋立て小柱しやぶしやぶ冬籠

うつむきて真白くありぬお茶の花

二つ三つ木の実落つる音淋し

正岡子規

千年の煤もはらはず仏だち

冬ごもり世間の音を聞いて居る

かさね吟行会

「東大駒場と駒場公園」 十二月

田中 清 秀 吟行記

山 元 正 規 選句

銀杏の葉に雄雌があるのは知らなかった。調べたところ真ん中に切れがあるのが雄株の葉、割れていないのが雌株の葉とのこと。雄はズボン形、雌はスカート形と覚えると便利であるが、科学的ではなく俗説とも言われている。

今回のかさね吟行会は東大駒場と隣接する駒場公園で行われた。天候は曇り一時晴れの予報だが銀杏談義をしながらのキャンパスは樹木に青葉が残るものの紅葉が始まり学府にふさわしい趣ある風景となっていた。銀杏の並木、幾つもの立看板、学食のランチメニューの広告、学生の談笑の声など遠き青春時代を懐かしく思い出す。

並木道染まらぬままに冬初め

陽子

秋の日の駒場キャンパス立看板

礼子

駒場野に楚々と咲きたり冬桜

由利

腊葉の銀杏黄葉を集めけり

清秀

早々ではあるが昼食に向かう、銀杏並木の先に大学構内には珍しい洒落た洋食レストランがある。店の名は「ルヴェ・ソン・ヴェール」（杯をかたむける）と言う。ランチメニューからお好みの品を各々選び腹ごしらえ、薄日が差し込む店内は近在の客達なのかほぼ満席、長閑な雰囲気満ちている。食事の後、更に校内を散策し隣接する駒場公園へと歩を進める。

何処からかシャンソン聞ゆ枯葉かな

陽子

ことごとく日の差す方へ冬薔薇

千美子

しいの実を拾ひて我は幼き子

礼子

俳句など忘れて励む椎拾い

しのぶ

駒場公園は加賀百万石の当主だった旧前田家の前田利為侯爵の駒場邸宅跡である。本邸の洋館は昭和四年に技術の粋を集めて建築され当時東洋一の邸宅と称せられた。駒場の野趣に合わせてイギリスのチューダー様式を取り入れている。これは後期ゴシック様式を簡素化した

もので外壁にはその頃流行したスクラッチタイルを貼り、内部は大理石のマントルピース、王朝風の装飾と赤絨毯、イギリス家具を配置しヨーロッパ調である。さらに日本の伝統的な唐草や雛菊をあしらった文様なども見られ落ち着いた雰囲気を漂わせている。また、周囲では建物をスケッチする日曜画家が腕を振るっていた。

洋館の屋根の尖りや冬はじめ

文彦

水絵の具洋館描く冬帽子

浩一

洋館に木洩れ日差すや赤絨毯

清秀

団栗に百万石の箔がつき

由利

本日の句会場となる和館は洋館に付属する迎賓館として建てられた木造二階建ての近代的和風建築である。大広間は客間と次の間を合わせて四十畳あり、前に広がる庭園は池を囲んで松や楓の樹木や石路の花が見られ鷺を模した大きな石灯籠も置かれている。何人かがゆつくりと腰を下ろして庭を眺め物思いに浸っている。

石路の花水音庭に満ちにけり

千美子

冬の陽の差し込む光笹の原

文彦

水音の石灯籠に石路の花

浩一

石路の花に寄り添ふ池の端

しのぶ

今回は常連が何人も欠席でどうなるものかと心配されたが幸い二人の新しい参加者があり賑やかに催行されほっとしている。囑目三句、句会はいつもの如く行われ無事に終了。次回の吟行はどのような会となるか期待がふくらむ。

■かさね吟行会■

日時 一月八日(金)

場所 清澄庭園

集合 庭園入口 十一時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（四五）

丸山 酔宵子

『ロードショーの後で』

今年も既に11月、残すところ後1ヶ月余り。毎月10本ペースのロードショー鑑賞も今日のロバート・デ・ニーロ、アン・ハサウェイのニューヨークを舞台のお洒落な、これぞハリウッド映画「マイ・インターン」で105本目である。今年105本の映画を見たということは、1本上映時間2時間とすると、210時間約9日間、一睡もせずに只管（ひたすら）映画に没頭していることになる。還暦も過ぎ、貴重な日々を映画三昧とは言え、映画は総合芸術、様々な人生の疑似体験をさせてくれる。

今年は、正月7日のロシア映画「ガガーリン」を皮切りに、ハリウッドばかりでなく、邦画も勿論、フランス、イタリア、インド、中国、韓国などいろいろな映画を堪能している。映画の選ぶ基準は、インターネットでの映

画情報を参考にしている。その中には評判の映画でもつまらない映画も少なくな、そのような映画に限って心地よく熟睡できるのである。

本年度アカデミー作品賞他3部門を取ったマイケル・キートン主演「バードマン」やクリント・イーストウッド監督「アメリカン・スナイパー」も衝撃的であったが、今年は古希をとくに過ぎた往年の個性的演技派の活躍である。冒頭のロバート・デ・ニーロ、「Dead ダニー君へのうた」のアルパ・チーノ、「ソプラノ」のダスティン・ホフマン。名優3人共に歳を重ねてはいるが、演技に無理がなく安心してみていられる。特に、鑑賞後の余韻が心地よく、美味しいお酒が飲めそうな感じにさせてくれる。

ロードショーはいつも日比谷か銀座周辺で午後2時前後スタートで、終演が丁度夕方4時前後となり、晩秋の陽も沈みかけ、罪の意識なくお酒を欲する時間となる。夕方3時や4時でもオープンしている店が少なく、映画鑑賞の後は銀座3丁目のウォーキングバー「MOD」に

立ち寄ることが多い。

パリの街並の一廓にありそうな赤いマホガニーの壁とよく磨かれた大きなガラス窓、そして小洒落た赤い天幕を入口に張った小さな立ち飲みバーである。バーテンダーは糊の良くきいた白のドレスシャツに黒い蝶ネクタイをきちつと着け、黒い長めのギャルソンエプロンをきりつと絞めている。バックヤードの壁面には世界の有名なブランド洋酒各種が整然と並べられ、スポットライトにきらきら輝いている。

「いつものヴィニョ・ヴェルデ『カニ』を下さい」「いらっしやい……。ハイ……。SANTOLAですね……。SANTOLAとはポルトガルのポルト地方で採れる『蟹』のことで、ポルトガル北部の特産である天然微発泡白ワインであるヴィニョ・ヴェルデの商品名である。シャンパン風のテイストであるが、アルコール度数は7%と低く大変飲みやすい。ビール代わりにいつもスターターとして飲んでいるのである。

「……今日は何の映画ですか……」「……ロバート・デ・

ニールのマイ・インターン。105本目だよ……」「ウエー……それは凄い。今年は、120本は行けますね……」「マスター、次はポルトガルの赤ワイン『ダン』をお願い」火宅の作家檀一雄がポルトガルに住んだことがあるが、毎日のように呑み、こよなく愛した赤ワイン「DAO」のことで、ポルトガル語でダンと同じ発音をするのである。濃く深いルビー色で、バルサミコ風味を感じさせる馥郁たる大人の味を楽しませてくれる。

ロードショー余韻グラスに秋の宵

酔宵子

本からのあれこれ(2)

米田文彦

潦倒新停濁酒杯

潦倒新たに停む濁酒の杯

俳句の季語に「高きに登る」「登高」という言葉がある。角川の俳句歳時記には説明として、「重陽に茱萸を

詰めた袋を下げて高い所に登り、菊の酒を飲むと齡が延びる」という中国の古い言い伝えがある。これを「登高」という。春の「踏青」のように秋晴れの日に近くの山へハイキングに行くことに用いれば新しい意味が加わるだろう。」とある。

そして、杜甫には次の有名な詩がある。

登高

風急天高猿嘯哀
 渚清沙白鳥飛迴
 無邊落木蕭蕭下
 不盡長江滾滾來
 萬里悲秋常作客
 百年多病獨登臺
 艱難苦恨繁霜鬢

風急に天高くして猿嘯哀し
 渚清く沙白くして鳥飛廻る
 無辺の落木蕭蕭として下り
 不尽の長江滾滾として来る
 萬里秋を悲で常に客と作り
 百年病い多で独り台に登る
 艱難苦だ恨む繁霜の鬢

ひとり高台で晩秋の景を眺め、自らの境遇を嘆く詩であり、ハイキングのような明るい雰囲気とは程遠いものようである。

弓道の仲間との集まりのときに、「唐詩選」の中には「弓」についての詩があるのかどうか、あればどういふものなのかを知りたいね、という話になったことがある。いつも馬鹿話ばかりしているのに、そのときはどういふ風の吹き回しだったのだろうか。

結局ざっとひとわたり目を通してみて、「弓」という字を見つけたのは王維の「觀獵」という漢詩だけだった。

風勁角弓鳴

風勁くして角弓鳴り

將軍獵渭城

將軍渭城に獵す

(以下略)

「唐詩選」には「原野を吹く強い風に、角弓がきしきしときしき鳴る。いまこそ狩獵の季節と將軍は渭城で獵をはじめた。(中略) 角弓は水牛の角で張り飾った剛弓。

それが鳴るとは武者たちの背に負う剛弓が強い風にきしむことで、弦音の響きをいうものではなからう。」という。

弦音の響きとは、弓で矢を発射したときに弦が弓の部分で打って発する音のこと。竹の和弓で上手に引くと冴えた弦音が出て醍醐味のひとつなのだが、それではなからうといっている。

では、水牛の角で張り飾った剛弓としている角弓とは一体どのような弓か、水牛の角には弾力性がほとんどないだろうから、弓本体の主な材料と考えるにはやはり無理があるのではないか。世界のどこでもそうなのだが、弓というものは弾力性の強い材料（例えば竹）と弾力性の弱い材料（例えば固い木）を複合的に合成して出来ている。（現在は新素材としてグラスファイバー、カーボンファイバーなどを使って普及している。）

結局いろいろ調べてみると、角弓の形態は日本のような長い弓ではなくアーチェリーを想像すれば分りやすいあの長さ（短弓）、木、竹、水牛の角、動物の腱などからなる複合弓、伝統的な弓ということになった。その弓は軽量で反発力強く、矢を遠くまで飛ばすことを目的と

して作成されたものといえる。水牛を飾りに使用した弓、というよりは実用本位の弓と考えた方が良い。

日本の詩歌（短歌、俳句）の世界では「弓」「弓の世界」を情緒的に使って構成しているものも結構あるのだが、大陸・漢詩の世界では違う。武器は武器、ということなのかもしれない。

ちなみに、世界の伝統的な弓、弓術、を愛好する人々の祭典が行なわれることも紹介しておきたい。国際武道大学教授の松尾牧則先生著の「弓道 その歴史と技法」によると、世界伝統弓術祭典（WTAF）といい、2012年で6回目、日本、韓国、モンゴル、イギリス、ハンガリー他の30か国で行われているそうである。

中国の伝統弓術は内モンゴル自治区、チベット自治区は別として、今は途絶えたと言つてよい、とも記されている。

ある自然科学者の手記(43) 大橋 望彦

今から思うと、祖母が四十歳代頃のことでありましょう、其の切っ掛けは聞いて居りませんので、確かと判りませんが、何時か紙人形を作り出し、頭は髪形丈は、色々凝つて、其れこそ手にした髪形作りを忘れ無い為にも、色々細かい点にも気を付けて制作したものと思われれます。ですので、髪型主体の、顔は何も無く、手足も付けず、只着物に帯を巻いた程度の人形で御座います。筆者も其れは実際に見て、記憶に御座いますが、今は霧散して御座いけません。其の後次第に人形も進化して、紙から布の時代に入ります。それでも、髪形は、頑として紙で作ることを変えませんでした。此の髪型は、最初、半紙を墨でまっ黒に染め、乾かせた後、箸に巻いてから、両端を真中に向けて押し付けて皺くちやし、其の半紙を細かく色々な形に切ったもの、前髪、鬢びん、鬢びんとか言つた物を糊付しながら髪形を整えて参ります。一方、針金を真中

から曲げ、その曲り尖った頂点には綿で、やや細丸く玉の様にして糊付けし、その上に細かく織つた絹布物で巻いて作つた頭を糸で固定致します。此の顔も次第に進化して後には丁度鼻に当たる部分には、紙で紙縫こりを作り、それを短く切つて糊付けした後、絹布を被せる様になりました。此の頭に順次先の紙で作つた髪形を糊付けして髪形が完成致します。この髪形が出来ますと、櫛かんざし、簪等の装飾品ですが、全て自作で、色々な素材を用い、其れは見事に手作りの物が作られており、お祝いの引き出物に菓子戴きますと、其の包みに巻いてある金銀の引き紐はバラして簪の柄に用いられたり、付いている鬘斗のしの真ん中の鼈甲色の昆布は綺麗に細かく切られて櫛となり、当時の巻き煙草の中の銀紙を使つて簪の飾りが出来、小娘の珍珠玉簪も縮れ布で丸くして拵える等、それは、正に器用其のままでありました。此処で使う糊は全て蒲鉾に付いて来る板切れに米御飯を載せ、竹篋へらで丁寧ていねいに練り上げて作ります。此の糊作りは時々私の仕事で

も有りました。此の頭、顔の下は、針金に、青海綿を糸で巻き付け、順次絹布で形を整えながら包み込んで糊付けしてまいります。出来た顔の布には「汗知らず、天花粉」でチャンと化粧をさせております。祖母の人形の一番驚いた、独創的な仕掛けが御座います。其れは、顔の眼は、細い筆で黒く書き入れますが、眉毛と口は、貝殻に入った口紅で、朱色に書き込んでおります。何故眉が朱色であるのかを祖母光子に問いました所、『女子おなごの眉が黒いと顔がキツクなるので、朱にして見たのです』と理由がありました。確かに男性の人形の顔の眉は黒でした。手足は紙紙縫こぎぬを巻きながら糊付け致し、手先は少し厚手の紙を指型に切ったものを糸で確り巻き付けます。足先は足袋を履かせた形の厚紙に絹布でつつんで作り、必要に応じ、紙で作った草履、下駄、ポックリと履物を作つて履かせます。さて胴体は、着物の部分は小切れを縫い合わせ、チャンと下着半襟、筒袖から長袖、振袖色々です。着物も袷あわせが若者の襟足であつたり、粋な抜き襟、武士の

奥方の様なキリリとした襟足、等と之も着せ方一つを見ても多様であります。それに着物の柄が大変です。粋筋の芸者さんや、花魁おいらん等の場合は大柄の派手な模様であつてもよろしいのですが、小娘や奥様とか、舞妓さんの様な場合は、どうしても柄も小さく絞りは成るべく細かく、小紋の布地が用いられます。此の小紋の布地、特に細かい絞りの小布こぎれは、東京では手に入り難く、父や私も、京都に出張の折りには必ず、お土産に彼方此方の呉服屋さんを訪ねたりして、入手して帰つたもので御座います。帯締めは、其の小紋の縮れ布を使い、帯止めはビーズを色々工夫して用いて居ました。最後は蒲鉾板を半分に切り、黒か白色の紙をきちんと張り、それに二本の針金の先が差し込める穴を二つ開けて人形を差し込みます。大抵はその板の裏には、白紙を一杯に切つた貼り付け、其処に光子のサインと、何歳と、製作した時の歳を書き込みます。

絹の話 (62)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

カイコがもたらす新産業

〔繭生産の危機〕

蚕と云えば誰しも「絹」と答えます。

私達の日常では絹100%の商品は着物以外に目にする事は殆ど無くなりました。そればかりか棉や麻等の天然織100%の物も少なくなり、色々な素材の混紡繊維製品で溢れています。絹も例外ではなく5%、10%混紡といった具合に利用されています。ですから絹は水面下に潜って消費量を増やしていますので、一般には目に付かなくなりました。

繭生産は過酷な労働で益の少ない事から世界の趨勢は最貧国に移りつつ有ります。日本でも、つい50年前迄は盛んに生産され、世界をリードして来ましたが、化学繊維の品質向上と繭生産に代わる多くの事業が興隆して来て、それに従事する方が遥かに楽で、高収入を得る事が出来るようになりましたので、今日の日本の繭生産は消費量の3%にも満たなくなっていました。

絹の需給は貧富格差の象徴産業だったとも言えます。しかし繭産業があつたお陰で、米も出来ない様な所でも

命をつなぐ事が出来た事も事実です。その様な生産背景の下に輸出され、外貨を稼ぎ、明治以来富国強兵の国策が支えられて来たのです。

国は昭和の半ばまで絹に関しては膨大な研究費を投入して来ていて、その成果は今でも他国に追隨を許さないレベルにあります。日本政府は技術移転を兼ねて、貧困解消対策や麻薬撲滅転換作物の一環で多くの国に資金を援助し、技術者を派遣して来ましたが、インド、タイの様に従来から養蚕産業があつた所以外殆ど成果は上がりませんでした。従って蓄積された膨大なノウハウを持つた、養蚕、製糸、染織、など一連の高技術経験者も高齢になり、それ等が利用されるチャンスを失い、朽ち果てようとしています。ところが、蓄積された高度な蚕糸技術を基盤にした、思いもよらない蚕新産業が開けようとし来ました。

〔蚕の新利用〕

カイコ(家蚕)は五千年の才月をかけて人間が作り上げた昆虫の家畜です。家蚕は自ら餌を探す事も飛ぶ事も出来なく、人の手を借りなければ地球上からすぐ姿を消してしまう虫ですが、生理、病理、ゲノムに至るまで克明に解析され、短時間(30日位)で世代交代し、その間に1^ミの卵から1万倍もの人間にとって必要な必須アミ

ノ酸を作り、桑の葉が無くとも人口飼料で大量飼育が可能なる事から、遺伝子組み換え等の実験動物として、有効性が脚光を浴びて来ました。

成功例としては、ホタルやクラゲ、珊瑚の遺伝子を入れて青や赤にあやしく光るパーティドレスが試作されました。現在は実験室で作った物ですから、その経費を計算すると何千万円にもなりますが、それでも欲しいと云うの問合せが世界各地から多数来ています。

また、蜘蛛のカイコより優れた張力と伸縮性のある縦糸の部分の遺伝子をカイコに入れた（10%挿入）スパイダーシルクが出来ています。この繊維は今日の絹を含めたどの繊維よりも機能性や物性にも優れていて、利用範囲は計り知れません。

さらに、絹は人にとって親和性のある蛋白質ですので、蚕に人間のコラーゲンの遺伝子を入れて、人と同じコラーゲンを造らせることも可能になって来ました。同じように皮膚も軟骨も伸縮性ある血管も製造可能です。そうなったら外科手術や美容整形も様変わりして来るでしょう。人に必要な蛋白質は近い将来遺伝子組み換えで造ることが出来るようになります。

【遺伝子組み換え】

現在、遺伝子組み換えには二つの方法が用あります。

一つは、1ミリの位のカイコの卵に細いカラス棒で穴をあけ、その穴に注射器で他から採取した目的の遺伝子を注入する方法と遺伝子の配列を切断して、その部分に目的の遺伝子部分を挿入する方法が用いられています。

前者は卵の目的の箇所に遺伝子が組み込まれる確立は20%前後ですが、組み替えたカイコは次世代にも繋がってゆきますので、量は可能です。

【遺伝子組み換え蚕の量産】

遺伝子組み換え生物は研究室の様な厳重な管理の中で可能ですが、一般に飼育する事は法律で禁じられています。蚕は人工昆虫ですので自ら外に這い出したりする事は有りません、蚕の糞の処理まで外に漏れないようにすると云う飼育設備を作った数軒の農家に認可が下り、実験的生産が始まりました。

これからは付加価値の高い繭を生産出来る事から、キノコや水耕栽培野菜のように繭も工場で生産され、医療用蛋白質製造工場、食品用蛋白質製造工場などに大企業が参入して来る事が予想されます。

飼育廃棄物処理等大きな課題は残されていますが、これからは、蚕生産は貧農と金持ちの関係でなく、万人に利用される大切な資源産業となるでしょう。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

五十二回

「月虹」 鯨島 満

二十四 金子阿岐夫 4

茂吉宿り君がもの書きし蔵座敷に君の葬りの準備す
すみゆく 金子阿岐夫『黄の光』昭和五十四年

題に「黒江太郎氏逝く」とある。黒江太郎は「アララギ」「群山」同人であった。山形県南陽市で齒科医院を開設していて、大石田の茂吉を何度か訪ね、また茂吉の訪問を何度か迎えた。歌の中の蔵座敷は黒江家の離れの一つであり、金子の父板垣も茂吉もここで雑談を楽しんだ。

大石田の茂吉先生をつひにつひに訪ねざりしと悔い
ていましき 同・昭和五十五年
み墓蔽ふ二十七年の茂りより羽音するどく鳶が飛び
立ちぬ

一首目には「故大道寺吉次氏」とある。大道寺は黒江太郎門下で、歌の勉強に熱心であることから茂吉に大事にされたが大石田の茂吉を訪ねることがかなわなかつ

た。ただ、昭和二十三年五月に南陽市で開かれた置賜アララギ会では茂吉に会うことができた。

二首目は「二十七年の茂り」から、この墓が、昭和二十八年に亡くなった茂吉のものであることがわかる。

茂吉先生病みし冬以来の雪といふ十二月なかば二尺
つもりぬ 同

大石田に移った茂吉が左湿性肋膜炎に罹り三ヶ月間の療養に入ったのは昭和二十一年三月であった。その前年の十二月、移居の打ち合わせのために茂吉が大石田を訪ねた日、「随行記」によれば「駅前の道路上は二尺位高い雪道になっていた」というから右の歌はその記録を踏まえていることになる。

臥しゐつつ父は「大石田の茂吉先生」を書きつぎ書
きつぎ喜寿迎へたり 同・昭和五十六年
朝夕に病む妹を診給ひし茂吉先生を思ふ医となりて
われは
臥す父の枕べに置く母と茂吉の写真に手を合はす春
彼岸にて

一首目は父の板垣家子夫が「群山」に大石田での茂吉のことを連載する姿を詠む。やがてこの文章は『斎藤茂

吉随行記』上・下（古川書房）他の大著としてまとめられた。右に「臥す」とある父・板垣はこの翌年に亡くなる。

茂吉生誕百年祭終ふと告げしかば父は重たげに瞼開きぬ
『路地の坂』昭和五十七年

今日骨になりたる父がテレビにて茂吉を語るよき笑顔して

茂吉先生のみ像の前にかじこみて立つわが肩に春のしづりす
同・昭和五十九年

三首目。茂吉像が上山市の斎藤茂吉記念館前に建てられたのは昭和五十六年五月であった、この除幕式に参加した父板垣は、「背負はれて再び三たび胸像をめぐりてもらひわれ去なんとす」（『湧水』）と詠んだのだった。

向川寺の冬囲ひせぬ荒れし庭に昭和二十一年を思ひつつ立つ
同・昭和六十一年

「昭和二十一年」というのは、病が癒えて歩けるようになった茂吉が板垣に案内されて黒瀧向川寺に登ったときのことであり、茂吉は「年老いてこのみ寺にのほれりとおもはむ時に吾は楽しぬ」（『白き山』）と詠んだ。そして、茂吉にとって忘れられないのは、ここからのぞく双眼鏡に母なる蔵王山を見つけたことであつた。この

ときの茂吉の声を板垣は、「ここから蔵王山が見える。蔵王山が見えるんだなあ。蔵王という山は天下の名山だからな、君、いい山だよ、蔵王は」（『随行記』）と記録している。

あららぎは枝打たれ馬酔木は刈り込まれ明るくさびし君が奥つ城
めぐりにはしづかに文字摺の花数本逆白波の歌碑は古りたり
同・昭和六十三年

一首目は金瓶・宝泉寺の茂吉の墓のようすであろう。二首目は、昭和四十八年に建てられた茂吉の第三の墓のある大石田・乗船寺境内のようすである。ここの歌碑には「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」（『白き山』）が刻まれている。

茂吉忌の今朝はおどろく翁草白銀しろがね萌ゆる山の斜面に
同・平成二年

翁草（白頭翁）は茂吉が最も愛した野草であり、作者は茂吉三十七回の忌日に山の斜面に咲くその花を見て、茂吉の姿を見る思いがしたのである。

楽しい時間 38

山本紀久雄

2015年11月30日

パリスの審判(2)

先日、突然にNHKテレビ局を名乗る男性から電話があった。当方が所属している経営者勉強会や顧問先に問い合わせして、連絡先を聞きだしたという。

用件はブラジルのマングローブのカキについて教えてほしいということ。電話で話していると、世界のカキ一般論へ広がってその延長線上、今まで食べたカキの美味いところベストスリーを述べた。それはタスマニア島とブラジル・マングローブ、それとクロアチアだと言うと、今度はクロアチアにも俄然関心をもつて、いろいろ聞いてくる。

当方は世界のカキについて3冊の著書がある。現在、4冊目を書いているところだが、日本で世界のカキについて情報を集めようとすると、拙書しかないらしい。時間とお金をかけて世界中のカキ養殖場を回ってきているので、そこにNHKが眼をつけたと思われる。

NHK総合20時放映「妄想ニホン料理」という番組がある。日本を知らない外国人に日本料理を想像して作ってもらうという、NHKならではの番組で、先般「アマゾンとセネガル」に行き、日本の土手鍋を作ってもらった」取材撮影をして

きた。その補足材料としてブラジル、それとセネガルの隣国であるクロアチアは海に面しているので、両国のカキについて教えてほしいというのがNHKの希望。

電話では十分取材できないので、当方の自宅にカメラと記録係を連れて行きたい。自宅にカキ殻とか参考資料があると思つたらしいので、何もないというと、今度はNHKスタジオに来てくれになり、最終的には恵比寿のオイスターバーで、カキを食べ、シャブリワインを飲んで二時間の取材撮影となった。その後、編集作業に入つたと電話があり、追加の写真を要望されたが、果して、当方が来年1月放映の番組に登場するかどうかは、今のところ不明である。

来年になったらNHKに尋ねてみたいと思っているが、カキにはシャブリが通説であり、最もカキに合うといわれている。これはワインとカキ業界の常識である。

もう一つ、ワインに関して経験した事例を紹介したい。

先日、家族と北信州の温泉に行き、夕食に地元産のアップルワイン赤をボトルでオーダーした。ウェイターがソムリエぶつて格好つけ、フランス人並みの開け方をして、当方のグラスに少し注ぐ。味の試飲である。

匂いを嗅ぎ、口に入れて渋みを確認してOKサインをしたが、どうも冷えずぎているような気がして、手でボトルを触ってみると、これは白ワインと同じ扱い、つまり、冷蔵庫に保管したものだと分かった。赤ワインは常温で飲む。これがワ

インの常識である。

そういえば思い出すのが、房総半島の著名市を、フランス人の旅行ガイドブックライターと訪ね、市長主催の宴席、場所は観光協会会長が経営する料亭、最初はビールしか出てこないで、主賓はフランス人だから赤ワインを提供したらという、持ってきたのがキンキンに冷えている赤だった。これにもビックリしたが、日本人はワインを飲むようになったが、基本的常識を知らないのではと感じた次第。

前号から「パリスの審判」、それは仏米著名ワインについて、ブラインド・テスト比較試飲会を行った結果、世界のワイン界を振動させ、当時のワインの常識をくつがえし、現在も語り継がれ、歴史をかえた事件について述べた背景に、日本人はこのワイン業界大事件を殆どの人が知らないという実態が分かったので、お伝えしたいと思ったわけ。

前号で「パリスの審判」をとりあげた理由について述べなかつたので、改めて、ここでお伝えする次第。

さて、1976年5月24日のパリのインターコンチネンタル・ホテルにおける、著名フランス人による「ブラインド・テイティング」結果は、カリフォルニアのシャルドネがフランスを圧倒した。

審査員全員がカリフォルニアのシャルドネを1位にし、内6人の審査員がモンテレーナ（米）を1位に挙げ、残りの3人はシャロン（米）をトップと評価したのだ。上位4位の

うち、3つまでがカリフォルニアだった。

（赤ワインのテイティング）

ウエイターが赤ワインを注いで回っている様子を見ながら、赤ワインの試飲では審査員が慎重になり、意地でもカリフォルニアを1位にはしないだろうとスバリュアは考えた。

白ワインでカリフォルニアを勝たせただけでも、ひどい裏切り行為だ。赤ワインでもカリフォルニアを1位にすることは国家に対する反逆である。審査員は、細心の注意でフランス・ワインを割り出して高得点をつけ、カリフォルニア物を低く評価するとスバリュアは思った。白ワインの試飲で時間を食ったため、スケジュールが押した。6時までに部屋を空けなければならぬ。スバリュアは、採点表を急いで回収して集計した。赤ワインの場合も、白ワインと同様、9人の審査員の得点を合計した。

審査結果の発表では、会場が水を打ったように静まり返った。スバリュアの声はマイクを使わなくても隅々まで響いた。

- 1位 スタッグスリプ・ワイン・セラーズ 1973年（米）
- 2位 シャトー・ムートン・ロートシルト 1970年（仏）
- 3位 シャトー・モンローズ 1970年（仏）
- 4位 シャトー・オー・ブリオン 1971年（仏）
- 5位 リッジ・モンテ・ペロ 1971年（米）

騒ぎは、白ワインの時より大きくなった。赤ワインでもカリフォルニアが勝つたのだ。誰がこんな結果を予想出来たろう？ 次に続く。

楽しくマナー ⑦

辻 照子

「デキャンタとマリージュ」

ワインや水を入れて食卓に出すガラス製の瓶をデキャンタ (decanter)、フランスではキャラフェ (carafe)、ワインをボトルから移し変えることをデキャンタージュ (décantage) といい、年代物のワインのボトルの底に沈殿している澱を除き空気に触れさせワインの味や香りを引き出します。

若いワインやその年に収穫した葡萄で造られたヌーボーワインはデキャンタージュはしませんが、まだ飲み頃を迎えてない若いワインは香りが乏しく、味わいも固く果実味が感じられないことがあり、キャラファージュ (carafage) と呼んでワインを移し替えて閉じているワインを開かせるために空気とマリージュをさせることがあります。

ヌーボーワインのなかで、例年11月の第3木曜日に解禁されるフランスのブルゴーニュ地方のボージョレヌーボー (Beaujolais nouveau) が有名です。

以前はその年の葡萄の出来をチェックするために、ワイン業者が主な顧客でしたが、その後解禁日をイベントとして毎年世界中のワイン好きが季節の楽しみとしています。日本では時差の関係でヨーロッパより早く飲めると、航空便で届くボージョレヌーボーを待ちわび、レストランやホテルでヌーボーパーティーが開催されます。

六本木にあるワインレストラン ミスター・スタンプス・ワインガーデン (Mr.STAMPUS WINE GARDEN) はミッドタウンの近くにあり、店内のワインセラーにはこだわりのワインがずらりと並び、ワイン好きにはたまりません。そこで開かれるヌーボーパーティーには多くの著名人も来られていて、日本経済がバブルに沸いた1980年頃、まだ世界のソムリエになられてない田崎真也氏とフランスの生活について楽しくお話しをしたのを覚えています。またパーティーアドバイザーの仲間達と、毎月各国のワインと料理やワインのマナーについてミスター・スタンプス・ワインガーデンのオーナーで名ソムリエの碩本修二氏を囲んで勉強会を開き充実したひと時を過ごし、たくさんの方のことを学びました。

結婚のことをフランスではマリージュ (mariage) と言いますが、それ以外でもワインとチーズや料理の相性、季節や気候など環境的な相性、体調・精神状態やシチュエーションなどメンタル的な相性などを表現するのにマリージュという言葉を使うようです。

海外旅行先で飲んだワインがとても美味しかったので同じものを購入して船便で送り、美味しいワインが飲めるとワクワクしながら試飲したけど、「なんか違う、旅行先での味と違う、同じワインなのにがっかりした」、という話を聞いたことが有ります。これはまさに相性の問題で気候、環境、体調、シチュエーションが違っていたのだと思います。また長い期間をかけて船便で輸送することはワインにとって条件が良くなく劣化してしまつた可能性もあります。船便で

も、プロのワイン業者が輸送するときは特別なコンテナで温度管理など細心の注意をしていますので劣化の心配はないと思います。

今回試飲する白ワインはパトリアッシュシャルドネ(フランス) まろやかな酸味でフルーティー。赤ワインはセンシィキャンティ DOCG (イタリア) 穏やかなコクと酸味が心地よい。シャトー・デ・ラ・ピエールルベエ(フランス) 果実味とタニンのバランスがよく、余韻が長く続きます。



*ポテトのパイ包み

材料 (4人分)

じゃがいも 2個 塩・胡椒少々 冷凍パイシート 2枚
チーズ 2枚 ベーコン 2枚 卵黄 1個
作り方

- ①じゃがいもは薄切りにし水にさらし、ラップをしレンジ(100g 2分) にかけて塩・胡椒をして、冷ます。
- ②のぼしたパイシートに①と細切りのベーコンとチーズをのせ包み、卵黄を塗りオーブンで焼く。

*牛肉と大根のオイスターソース煮

材料 (4人分)

牛肉切り落し 200g 大根 1/3本 にんにく 1片 A

(オイスターソース・酒 各 大さじ 2 醤油・砂糖 各 大さじ 1) サラダ油 大さじ 1 大根の葉 適宜
作り方

- ①大根は皮をむいて1cm厚に切り、ラップをしレンジ(100g 1分) で加熱する。
- ②フライパンにサラダ油と潰したにんにくを入れ香りが立つたら牛肉を焼き、①の大根を加えひたひたの水とAを入れて落し蓋をし、味が染みるまで煮、大根の葉をみじん切りにして散らす。

*キノコのマリネ

材料 (4人分)

しめじ・えのき各 1パック しいたけ 3枚 鷹の爪 1本
白ワイン 大さじ 1 塩 少々
A (酢・麵つゆ 各大さじ 2 オリーブ油 大さじ 1 砂糖 小さじ 2 塩・黒コショウ 各少々 にんにくすりおろし 1片分)
作り方

- ①しめじは小房に、えのきは半分に、しいたけは薄切りにし白ワインと塩をふり、ラップをしレンジ(100g 1分) で加熱しザルにあげる。
- ②鷹の爪の種をとりちぎってAに混ぜ①を熱いうちに加えずつくり混ぜ、冷やす。

「歴代天皇御製歌」（四十七）

貫名海屋資料館

「土御門天皇」第八十三代・在位一二九八年（四歳）―一二二〇年（十六歳）（鎌倉時代）

「土御門天皇は、御鳥羽天皇の第一皇子。土御門天皇の在位中後鳥羽上皇による院政がなされていた。源頼朝の死。その子頼家が征夷大將軍に任じられたが、北条時政が幕府の執權に、頼家を殺害。源実朝が將軍となるが、北条義時が執權となり、北条氏の基礎が出来てゆく。

日蓮は土御門天皇の皇胤（天皇の男系子孫）であるといわれる。

実朝は、歌集「金塊和歌集」を残し、藤原定家らは「新古今和歌集」を選した。他派仏教徒の排斥があり、法然是讃岐に、親鸞は越後に、流された。

夏

庭のおもの土さへさくる夏の日にひとりつゆけき姫百合の花
もしきの庭のたちばな思い出でてさらに昔をしのぶ袖かな
夏草のふかきおもひもあるものをおのればかりと飛ぶ螢かな

（御集）
（統拾遺集）

春

かぞふればなげきも老もつもりけりよそなる春を送り迎へて
野辺に出で、誰家づとと折りつらむ春の蔵にまじる虎杖

秋

窓ふかき秋のとし火きえやらでもゆるは胸の思ひなりけり
年のうちにまた咲く花のなきまゝに菊の籬をなほぞつくるふ

冬

むら雲のたえまたえまに星見えてしぐれをはらふ庭の松風
山陰にふるしら雪の消えやらでのこるうき身の末ぞかなしき

玉葉 846

恋

わかれても幾有明をしのふらむ契りて出でし故郷の月

神

ひかりをば玉串の葉にやはらげて神の国ともさだめてしがな
うき世にはかゝれとてこそ生まれけめことはり知らぬ我涙かな

続千載 1399

続後選 532
増鏡

「歴代天皇御製歌」(四十八)

「後堀河天皇」第八十六代・在位一二三二年(十歳)―一二三三年(二十一歳)

後堀河天皇は、後高倉院・第三皇子。この時代は、北条泰時が執権。
親鸞の「教行信證」が成立、浄土真宗を開いた。

和歌の浦葦辺のたづのなく声に夜わたる月のかげぞさびしき

新勅撰集

山の端を分出づる月のはつかにも見てこそ人は人をこふなれ

新勅撰集

再び長塚節生家へ(1) 夏目勝弘

鬼怒川の氾濫による関東鉄道の復旧を度々電話し、ようやく長塚節生家へ再び行けることになった。

節の創作の原点である鬼怒川周辺がどのようになっているのか、今日は小説や写生文に書かれているのを検証とまではゆかないが、知りたくなり出掛ける。

もう一つは写生文の「我が庭」を書かれた内容を、書斎より見たかった。

前回は訪ねたときには書斎には入らず、外より概観も中心に庭のみを見てきた。

今回は写生文「我が庭」の内容をこの目でみて参考にした。

小説「土」の短篇小説のなかに・鬼怒川の洪水がどのような形で取り入れられているのか知りたく思った。

小説「土」の題名は、今回「土」の書かれた地域を案内していただいた、生家の案内をボランティアで十三年も続けておられる石山浩三氏が方言まじりでの説明では。

「土」の大部分は生家より二キロ余りの所の岡田小学校の図書室で、一日数時間かけて書いたと、そして題名を校長に相談したところ農民のことが中心だから「土」にしたと言われ、題となると石山氏が話してくれた。

今回の鬼怒川の堤防の決壊により洪水となり大きな災害となった。「土」のなかでの鬼怒川の洪水くだりを、書き出してみたい。

(例年の如き季節の洪水が残酷に河川の沿岸を舐めた。洪水の去った後は、丁度過激な精神の疲労から俄に老衰した者の如く半

死の状態を呈した草木は皆白髪に変じて其の力ない葉先を秋風に吹き飛ばされた。) 略(勘次の村は台地であるのと鬼怒川の土手の篠の密生した根の力で僅かながら崩壊する土を引き止めたので損害が軽く済んだ。略(漸く自分の田畑の作物が僅な損害に事つたことを確かめ彼は激甚な被害地の状況を伝聞して自分の寧ろ幸であつたことを竊に悦んだ。)

おつたは家のなかで四斗樽を倒に置いて、その上に板を渡し居通した。夜横になつてみると耳の側でさら／＼と水が動く、うつかり眠つたら流される。水は増し天井に頭が打つかりそれで生命が、ちぢめられる思いがした。

水の中には仕事が出来ないので、みんな棒の先に鉤をつけ、庭でいくらでも鮒が釣れた。そして浸水した家々に、役場から、やまと煮と書いた牛肉が三本と菓子と塩が一軒ごとに下げ渡された。要約するとそんなことも書いてある。

鬼怒川の洪水の水が落ち土手につく大きな洲がより大きく広がっている。その砂を萬能で堀ている女たちがいる。萬能の刃にかかつてでくる二寸から六寸ぐらゐの木片を集めている。「どうするんだね」と勘次が聞くと「これ干して置いて燃やすのさ」と女は言う。そして「赤え灰に成つてな火を弱えのさ、それでも鹿糞買よりええかな」手拭で白髪を拭きながら言った。

短篇小説「教師」のなかより

(自分が写真を出して見せると佐治君は熟視した。鬼怒川の上流が天下の絶勝であることや、殊に豪雨の後における水勢の激甚なことや、自然の絶大なる威力が峡谷の民に迷信を抱かせて居ることや種々なることを語つて見た。

まだあるが次回以降で書くこととす。

再び長塚節生家へ(2) 夏目勝弘

大きな長屋門の前の節の像の前にしばし立ち、道を越した公園となつてゐる広場へ、ただ何もない広場ではあるが「土」のなかの勸次が開墾した所でもある。

今も広場の奥には櫟の大木が冬木となつた枝を広げている。横に沿う道の反対側は、緑の葉が巻きはじめた白菜畑が緑色に広々と晩秋の空の下に続いていた。

この畑も勸次が四キロ余りの唐鍬で拓いたものとのこと。

生家案内所で案内人の石山氏を待つ、お茶を二服いただいていると軽トラックが来た。

石山氏に再び会う。八十六歳とはおもえない元気で案内をした。さつそく書斎を案内し説明をしていただく(書斎については次回に書く)。

「土」の風土を回り説明をしてくれるとのこと、軽トラックに乗り込む。

広い長塚節家の屋敷の裏手の畑を越し竹藪がある。そこが勸次の家の跡である。節の家も類焼しなから火事で焼けたこともある。節の家も類焼したとあるがこれは「土」のなかでの、ただ二つのフィクションのこと。

藪を右に曲り沢田に沿う道を南に向う、その間の土地はみな長塚家のものとか、そして右に直角に曲がり、垣根に囲まれた家が短篇小説「芋堀り」の題材となつた家である。

節の家から東隣り二軒目で起きた事件を、名前も実名で事細かに忠実に書いてあるため、モデル問題が起きた、節は事実を書いて何で悪いかと言つたため村民等が長塚家を非難した。節の母が金でなんとか治めた。

軽トラックは四ツ又を左へそしてすぐ左へ行くと桑原神社、木々に被われ暗い長い参道を抜けると広場に出る。左り奥に本殿が見えた。広場の縁に太い樅の木があり、この陰で勸次が娘のおつぎを監視していくそれを節が克明に書けるのは、そのころ節は青年会の会長をしていた。若者の風紀の乱れを防ぐために特に盆踊りの時などは、特別に厳しかったとか。

軽トラックは桑原神社を出、高崎坂東線に出て少し行き坂を上つた所が節の墓のある墓地。

新道より直ぐ墓に入る道ではなく墓の広場のつづき、広場の中ほどに平な石が二棺桶を置く所、広場を囲むように黒御影の墓が建っている。なかには現代風な墓には文字などが彫られていず、金色の二条の線彫で右上から左下へ、鬼怒川をイメージしたのだろうか。

色々な墓の並ぶ一番奥に隠れる様に長塚家の古びた墓石が三十余はあるだろう、透き間なくしりと並べられている。その前の中程に長塚節之墓と、利休ネズミ色の小振りの墓石に節の直筆の文字を拡大して彫られている。

供華を供える所も何もない石の台に石碑を建てた簡素墓であつた。数珠を出した静かに合掌をして、国生の渡し向う。軽トラックがようやく通れる道を、ゆるゆらと行き国生の渡し場の上に出る。

前回来た時も立ち寄つた所であり、写真二枚を写し杉山地区に建つ、歌碑に向う。地主の寄附による広場に高さ二メートル余の歌碑には(鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠ききこえて秋だけにけり)の一首。

歌に接し大きな切り株が見える。石山氏によると太く大きくなりすぎ歌碑を圧するため切つたとか、歌碑も少し右に傾いていた。石下駅まで送つていただく。車窓より見える刈られていない稲田は水害によるものか。

「氷魚」のことから (180) 岡本八千代

ああ、また新年を迎えることができそう。何やかやと言いながらも、私の『「氷魚」のことから』も180回を書こうとする。ああ、これも「三河アララギ」のお蔭である。私の拙ないその時その時の心のまとめ書きにすぎないのなのに。感謝にみなぎるばかり――。

机の上に「余は、交際を好む者なり」という本が置いてある。その本の帯に「すきな人は無暗にすきにて、嫌いな人ハ無暗にきらひなり」とある。「嫌ひな人ハ」云云のことは今日の私には楽しい。

子規は、面白い人だ。とてもユーモアがあると感じつつ、「正岡子規の〈楽しむ力〉(坪内稔典著)を参考に今回も子規の世界を書いてゆこう。

○子規の名前マデ

子規は名前好きであったこと。

○常規凡夫、文鬼。 獺祭魚夫。

○子規(シキ・ホトトギス)、

○秋風落日舎主人、 野暮流。

○盗花、 沐猴冠者、 莞爾生。

○蕪翠、 迂歌連達磨、 馬骨生。

○色身情仏、 虚無僧。

これらは、普通に用いられている。またまれに使う名、少しだけ使う名他多くある。

○真棹家、 冷笑居士、 四国仙人。

○浮世夢之助、 野球、 薄紫。
○瘦肉団子、 面読齋。

以上は明治二十三年の時点の話して、これ以降も子規はたくさん名を用いたのであった。

○浮世女の助、 獺祭書屋主人

○水晶花児、 卯の花舎、 竹の里人

○むらさき、 台南生、 越智処之助

明治三十年代になると、子規、竹の里人、獺祭書屋主人の三つが多く用いられた。

「名前は仮面のようなものであり、名前を変えようと人格が変わる。名前によつて 新しい人格になることを楽しんだと思われる」と、坪内稔典氏は言われる。そのように、子規は自分の心を広げて、苦しい病の現実を受け入れて乗り切つていったのかもしれない。そして、現実を楽しむ心へともつていったような気もする。

子規は、多くの友だちを得、友だちはまた子規を慕つて寄つてくる。――どんな境遇にあつても、楽しみの中にある自分をつくつてゆくのだらう。そのつに、他人につけたあだ名を書いてみる。

○鳴雪君 一卵

○碧梧桐君 一つくねいも

○虚子君 一さつまいも

○四方太君 一山ノ芋

○瓢亭君 一大根

○漱石君 一柿

仲良しの俳人を野菜類にたとえた面白さ。

これでは無暗にきらいな人でも楽しみの中に巻込んでしまうにちがいない? 私はまだ巻き込まれてしまったような今日である。

ことのはスケッチ (445) 今泉 由利

『天田愚庵』 つづき②

明治三十六年。東京大相撲の黄金時代。愚庵は、京都から上京し、陸羯南に泊り、陸羯南手配の栈敷席より相撲を観戦した。

回向院は、明暦三年の大火事で亡くなった人々を供養するために建てられた寺院、多くの人々の、相撲を観戦する所となっていた。

境内、本堂の右側に設けられた、よしず張りの巨大な仮設相撲小屋で、春と秋は江戸、夏は京都、秋は大阪と、開催された。

梅が谷関と常陸山山関と：愚庵は、ほとぼしる歌を詠んだ。

○梅とよび常陸とさけび百千人声をかざりにきほひとよ
もす

○天地も今砕けむ増荒雄がいかづちのときほひすまへ
ば

両国回向院境内全図の錦絵をみつけた。櫓から櫓太鼓が聞こえてくるようだ。

梅、常陸と叫ぶ愚庵の声が聞こえてくるようだ。



東都名所 両国回向院境内全図(とうとめいしょ えこういんけいだいぜんず)
歌川広重(うたがわひろしげ)画 天保13年(1842) 東京誌料 587-C8

編集室だより【二〇一五年 十二月】

三河アララギ賞 阿部淑子様

骨盤を伸ばす体操繰り返し伸びた姿はシャッキリとして

日常のこと、お仲間のこと、宇宙のこと、人思いやるお心、気配り、最先端のことごとを、身近に引き寄せられて、みごとに詠まれます。

○アルベルト・アインシュタイン博士、1922年（大正11年）妻のエルザさんと、日本郵船の北野丸に乗り日本講演旅行に來られた。その様子を、テレビの映像で見ていた。迫害を受けておられたこと、研究が戦と結びついてしまった事、博士が立寄られた日本のあちこちを、岡本一平画伯の、何とも素敵な画が残されていること。こんな重大なことがあった事実を、しみじみと知るのでした。

○醬油をスーと塗って焼いた串だんご、私の故郷の味。よく似ている。茂助 だんご をみつけた。ちよと江戸風に清鍊されて入るけれど、齒ごたえは良し、氣に入った。

○高校の同期生、三河アララギの歌人、伊藤忠男氏が、仕事かたがた東京に來られたから、ひと時、皆で集った。

沢山話すことがあった。伊藤君の奥方は、東三河事務所で、大須賀寿恵先生の直属の仕事をしておられた。そのうえ校医の父から、予防接種を受けられたとも。

○駒場東大前、東大キャンパス、駒場公園吟行。素直に巨大に育った木々のもと、いかにキャンパスらしい雰囲気俳句になるか、苦心あり。全く立派な公孫樹の紅葉した落葉が、とても小さかったこと、銀杏もかなり小さい。

○「もう何も出来ない」「自身を、どのように終りにすれば良いのだろうか」ずっとこの思いにとらわれていたけれど、飽きてしまったところ

「葛錦北斎は80才で500kmをも歩いて移動し、絵を描きに出掛けられた。90才でも、増々描き続けられたと知る。

○天我をして五年の命を保たしめば真正の画工となるを得べし

○人魂で行く気散じゃ真野原（辞世の句）

○『富士山越龍図』、富士の麓より昇天する龍図。（肉筆絶筆）

ごく小さかった時から、私が寝起きしていた部屋の襖に、富嶽三十六景と、歌川広重の「東海道五十三次」の版画が、びつしり貼り付けてあった。父がして下さったのか、母がそうされたのか……とにかくいつも眺めていた自分を思い出す。

北斎さんの、絵を描いておられる姿を心に、自分自身を有意義にしてあげなくては……。

和菓子街道（111）

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

姫街道(7)

姫街道気賀宿（細江町）の名物といえば「みそまん」。黒糖皮で
漉し餡を包んだ茶色の蒸し饅頭で、元は一般的な茶饅頭とか利休饅
頭とか呼ばれていたが、その色が赤味噌に似ていることから、いつの
頃からか「みそまんじゅう」略して「みそまん」と呼ばれるように。

気賀に4軒あるみそまんの店のうち、元祖を名乗るのが姫街道沿い
に店を構える福月堂だ。昭和初期、初代が天竜浜名湖鉄道の金指
駅前で菓子屋を始めたが、後に気賀の現在地に店も移転させた。

福月堂では元々、大福まんじゅうと呼んでいたものを、いつしかみそ
まんじゅうと呼ぶようになったそう。こちらのみそまんは大きめで扁平。月
マークに「福」の字の焼印を押した濃い焦げ茶色の皮は、ぶるぶる、

むっちりといった食感だ。

餡は粘りが強いが、甘さはさっぱりめで、食べ応えは軽い。つまり、いくらでも食べられる。

白皮のものは今も大福まんじゅうの名で健在。白黒あるのは気賀でもここだけだ。



黒糖皮のみそまん、白皮の大福まん。

◆福月堂

住所：静岡県浜松市北区細江町気賀108-1

電話：053-522-0307

お知らせ

△二月号の原稿は、十二月三十一日（木）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、毎月の原稿に同封して下さい。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の一六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができ
ます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇発行所・〒一一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A
TEL・（〇三）五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yuri18@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://imaizumi.yuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美